

R-18

成人向け



ふたなり



百合



Andromeda
WUQLOJUGQW



AndromedA

作画：雀

シナリオ：もくず

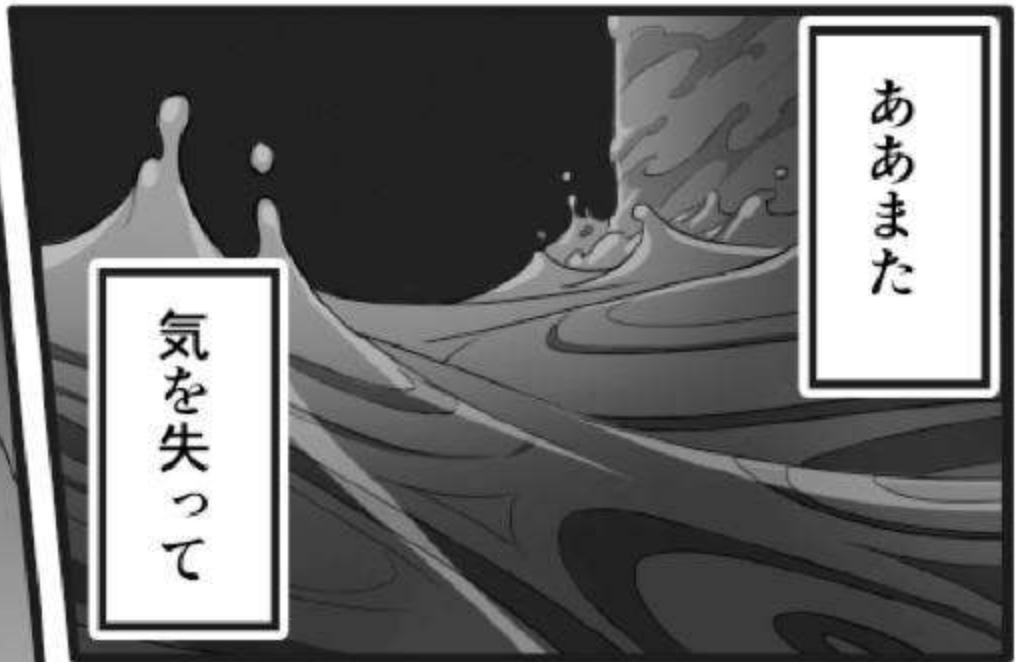
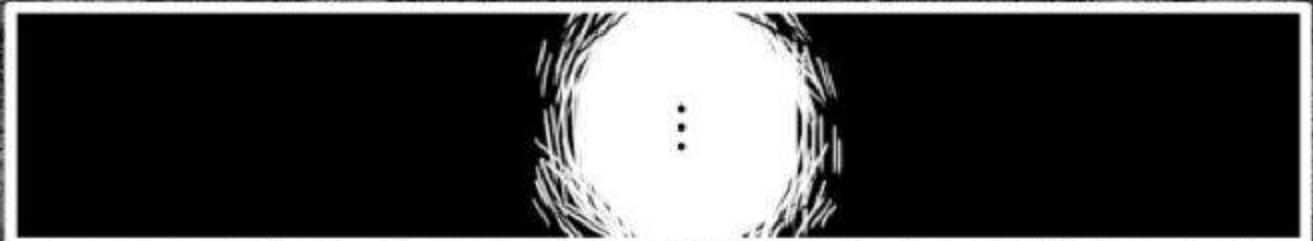
※ご注意※

Jaspisのふたなり成人向け漫画です。

『Tentacle dick』と言って触手状の生殖器を
シェイプシフトで生やしている設定になります。

あくまで個人的な妄想です。

公式とは一切関係ありません。



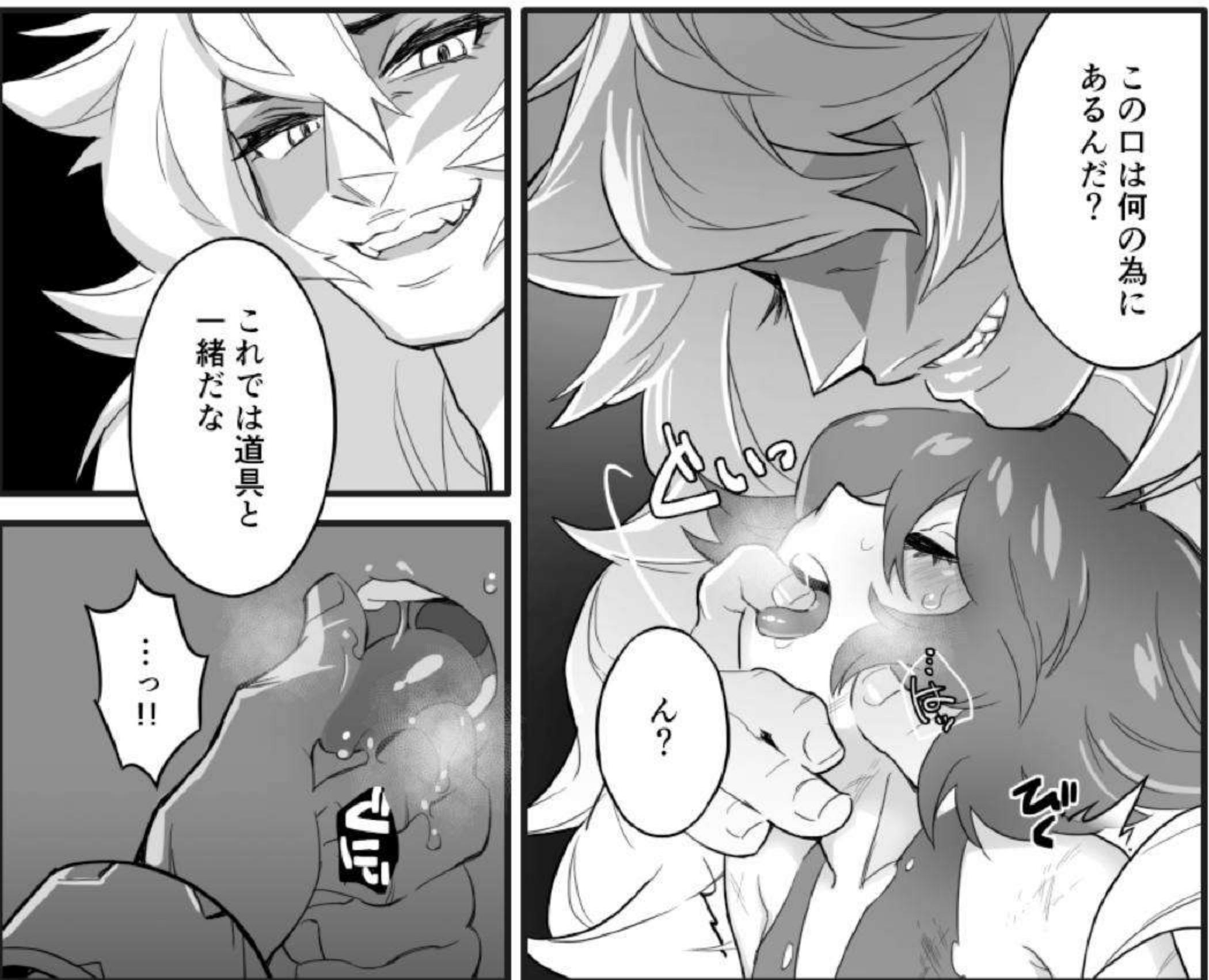
最悪の気分だわ

AndromedA

貪り
続けられる

よく
飽きもせず

マラカイトに
なつて数ヶ月





強がつても無駄だ



三〇二



無駄だ







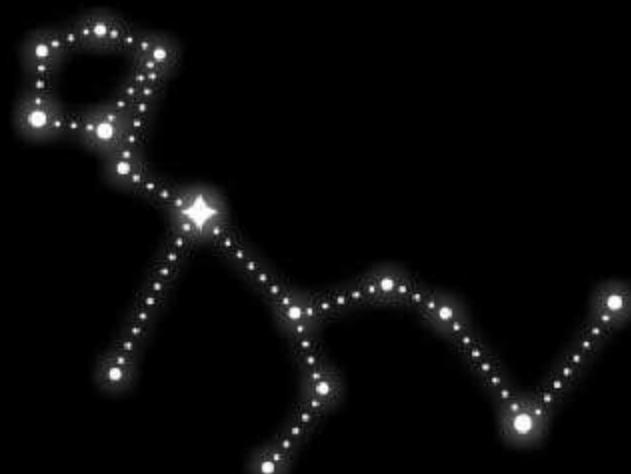






Cetus

作：もくす



Cetus

まるで見えない鎖に縛られているように。

この茶番を何度繰り返したのだ？

ジャスパーは自分が凌辱したジェムを見つめ、自問した。

光

も差さない水底。

そこはジャスパーにとつての牢獄だつた。

溺れ死ぬことさえできぬ精神の牢獄。

水牢の看守は瑠璃色のジェム、ラピスラズリ。

そのラピスは、囚人であるジャスパーの足元にぐつたりと横たわっていた。あろうことか、彼女は気を失っている。

ラピスの衣服は乱れ、汗ばんだ額に髪が張り付いている。上気した頬。乱れた呼吸。ぐつたりと横たえた肢体は、時おり微かに痙攣していた。飛び散った粘液がラピスの身体を濡らし、彼女を妖しく汚している。その姿にはジャスパーをこの牢獄へと連れ落とした時の勇ましさはない。

ジャスパーが行動を起こすには申し分のない状況だ。今ならこの牢獄から抜け出すもの容易いかもしない。しかしジャスパーはラピスの前から動くことができない。

初

めは立場を解らせるためだつた。

この空間において、ラピスラズリはジャスパーに匹敵するほどの力を持っていた。

一刻も早くラピスを捻じ伏せなければならぬ。どんな手段を使つても。

その為にジャスパーは彼女の身体を貪り屈辱を与えた。ラピスラズリを完全に打ちのめしマラカイトの主導権を奪う。それで全てが終わる筈だつた。

ことはジャスパーの思惑通りに運び、水牢を脱出できるチャンスが訪れた。

しかしジャスパーは逃げ出さなかつた。

それから何度もチャンスが訪れたが、結局ここに留まつている。

なぜラピスラズリとの合体を解けない。

なぜだ？

チャンスを不意にする度に、ジヤスパーの心は言いようのないものに侵されていった。

彼女を貪り喰いたいという欲望に。

まだ足りない。完全な形に溶け合いたい。
ラピスラズリの全てが欲しい。

だが、しかし。

無防備なラピスを前にして、内なる自分たちが醜く争いを繰り広げ心の均衡を崩そうとする。

三

ヤスパーは、気を失い足元で横たわっているラビス二年生を伸ばす。

彼女の肩甲骨の窪みから肋の浮いた背へとなぞるよう

に指を這わせた。

怪物じみた力を秘めているとは思えない華奢な体躯。

上体を抱き上げ顔を見つめる。

整つた顔立ちに美しく伸びる睫。艶やかな唇に上気した頬。薄く浮かびあがった首筋。

見て いるだけ で 猛烈な 混きを 覚える
欲しい。

抑えつけている感情が溢れだし叫びそうになるのを

堪える忍

こんな欲望を抱えたまま合体を解くなど出来るわけが

ない。

まだ足りない。完全な形に溶け合いたい。

九月九日重陽

卷之三

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

耐えるジヤスパーの額から、つと汗が滴った。
その零はラピスの鎖骨へと伝い、彼女から浮かび上が
った零と混じりあう。

「ツ!」瞬間、ジヤスパーはラピスの首筋に歯を立てた。

ラピスの肢体がびくりと跳ねた。

困惑するラピスをよそに刃を何度も突き立てる。「な、につ……してるので……！」

な
に
て
し
て
る
の
！

ラビスはシャズバーの顔を突き放そうとする。彼女の

表情は怒りと嫌悪にそして戸惑い

の！」

ジャスパーは答えない。そのまま喰らい続ける。

「自由になりたいのなら、私のジェムを碎けばいい！」

過去のジャスパーならもつと早くそうしていただろう。しかし、今は違う。

ラピスの後頭部を手で掴み、何度も何度も首筋に唇を

押し付ける。

ラピスは理解できないといった表情を浮かべ抵抗を試みる。もう一度、ジャスパーを手で押しのけようとした。

無論、ジャスパーは微動だにしない。それどころか両腕を掴まれてしまう。

「この……、んっ!?」

そして先ほどまで掴んでいた後頭部を離し、今度はラピスの頸を掴んで——舌をねじ込んだ。

「——ツ！ んうつ——ツ!!」

必死に唇を引きはがそうとするラピスを抑えつけ、彼女の柔らかな口内をじっくりと味わう。

唇を貪りながら腰を撫でてやると、強張っていた身体から徐々に力が抜けていく。

最初からそれを求めていたかのように。

あくまでも私を悪役にしなければ気がすまないのだな。狡い奴だ。

唇を離し、ジャスパーはニタリと笑う。

すっかり抵抗しなくなつたラピスの表情はとろけきつていた。唇からはだらしなく唾液が糸をひいている。その瞳の中に微かな欲望が揺れているのを見逃さなかつた。

かつた。

そうか、やはりお前もそうなのか。

直感的に理解する。彼女も私と同じ思いを抱いている。

だがそれを本人は自覚していない。

私もお前も自身の欲望から目をそむけ、否定するためにお互いを傷つけあつたのだ。

だからこんな茶番を繰り返しているのだ。

だがもういい加減、先に進まなければならない。

これはジェムとしての本能がより強い力を求めているのだろうか。それとも別になにかを求めてているのか。

お前は知りたくないかラピスラズリ。

この渴きを満たすものの正体を。

ジャスパーはラピスの太腿のさらに奥へと指を潜らせる。

ラピスはもう抵抗しない。まるでジャスパーの指が自分が一部であるかのように受け入れている。

果肉を割り開くと熱い蜜が溢れた。

ジャスパーはラピスを押し倒す。ふたつの影が重なり、ひとつになった。

欲望の答えに気づくまで彼女たちは何度も溶け合い、そして何度も自分を喰らう。



R-18

成人向け



ふたり



百合



Andromeda

AJUQLOIJGQW



